

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 年 月 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	川口ゆり

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、屋久島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
フィールド科学実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 10 月 15 日 ~ 平成 26 年 10 月 21 日
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学 野生動物研究センター 杉浦 秀樹 准教授、同 霊長類研究所 MacIntosh 准教授
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
上記の日程でフィールド科学実習 (屋久島実習) に参加した。屋久島は九州南部に位置する島で世界自然遺産に登録されている。屋久島にはニホンザルの亜種のヤクザル (<i>Macaca fuscata yakui</i>) が生息している。本実習は、ヤクザルを対象に行動観察と試料収集を行い、ステーションに持ち帰り分析することを通してフィールドワークとラボワークの両方を行うスキルを身に着けることが狙いである。
10 月 15 日 移動およびデータ収集 16-19 日 データ収集及び分析、 20 日 分析及び発表 21 日 移動
屋久島に到着した 15 の夕方と 16 日は全員でフィールドに出た。西部林道と呼ばれる屋久島西部が私たちのフィールドとなった。17 日-19 日は 3 班に分かれ、日替わりで 1 つの班がラボワーク、残りの班がフィールドワークを行った。フィールドもラボも朝 7 時半頃から作業を開始し、16 時頃、ステーションに集まった。夕食前後には何人かが実験室での作業を再開した。 フィールドワークではひたすらサル糞を収集した。糞の個体の属性が分かっていた方が都合が良いので、なるべく落ちていない糞ではなく、目の前で糞をするのを確認したものを採取する必要がある。排便の前には尻尾を挙げるなどの特徴があるが、事前にそのような兆候を察知するのは難しかった。 秋は繁殖期であり、何度も交尾行動が見られ、交尾行動後に特有のにおいも感じた。私にとっては非常に強いにおいに思えるのに、この匂いを感じる人と感じない人がいると聞き驚いた。発情しているメスにはかなり攻撃的な個体もあり、そのために観察しづらいこともあった。オスがよそを向いている間にじりじりとさりげなくオスに接近するメスがいたのが興味深かった。どちらかという、オスが発情メスをとりあうものであって、メス側はなにもしなくても相手に困らないのではと思っていたが、メスがかなり積極的だった。 屋久島にはヤクシカと呼ばれるシカも生息する。ヤクザルは普通のニホンザルに比べて一回り小さいが、ヤクシカも本土のシカと比べて体サイズがかなり小さい。今年生まれのシカも何度か見たが、マメジカを思い出すくらい小さかった。シカとサルが非常に近いのも印象的だった。シカはサル糞やサルが木から落とす実を食べるのでサルから恩恵を受けているようだが、サルが恩恵を享受している場面は少なくとも実習中は目撃しなかったように思う。ヤクザルはシカの背中に乗る個体もいるということを知っていたので観察したかったものの、他のグループは観察したらしいが私は見られなかったのが残念だった。 フィールド班は車で移動し主に道路で観察するロードチームと道路から森に入って行って観察を行うフォレストチームに分かれた。サルは道路を移動のためにも用いるが休息の場として用いることが多く、動きがないことも多かった。私は道路で休息しているサルを観察するよりは、自然な環境で活発に活動するサルを観察したかったので、フォレストチームに参加することが多かった。今までの経験から、森の中の移動も苦手ではないと自負していたところがあったが、斜面がきついところが多く、そのような場所でもかなりの速度で移動するサルを追跡するのは大変であり、息を切らして追跡した結果持ち主の分からない新鮮な糞だけが落ちていたということもあった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



マウンティング。



道路では森以上にくつろいでいるように見える。



首元に傷を負ったメス。個体識別の重要な手がかりとなる。



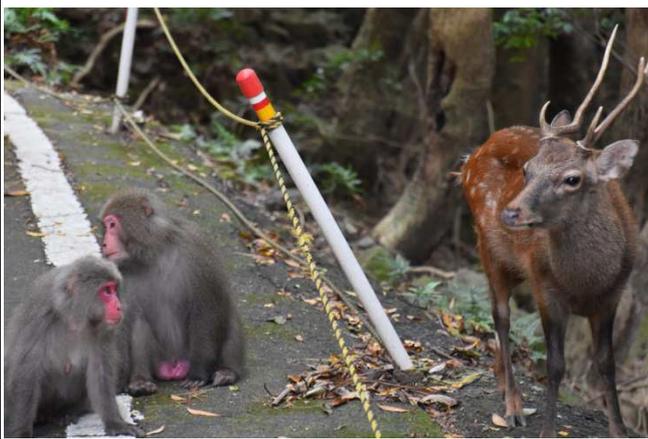
鹿の頭骨。縫合線がまだ残っているのがわかる。



今年生まれた鹿。とても小さく愛らしい。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



サルとシカはかなり至近距離にいる。

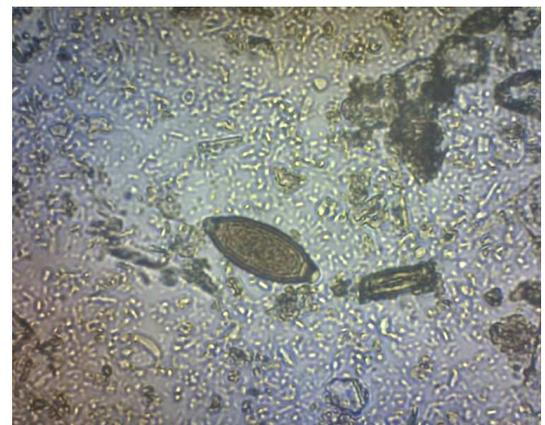


道路からの観察の様子。

実験室ではサンプル処理班が、採取した糞を DNA、ホルモン、寄生虫の 3 つの用途に分けることから始まった。その後、寄生虫の分析を行うために、遠心分離などを行い、寄生虫が含まれる部分のみを抽出した。分析班はサンプルを顕微鏡で観察した。一つのサンプルに対して 3 回観察を行い、サンプルに含まれる寄生虫の数を数えた。私が観察したサンプルは、チューターの Liesbeth 氏が確認してくれましたが、たまたま寄生虫が 1 つもいなかった。そのため、寄生虫を見つけ出す自信がなかったこともあり、ラボでは主にサンプル処理班に回った。こちらのほうは、スムーズにできるようになった。



ラボでの作業。



寄生虫 (*Trichuris trichiura*)。

(撮影：中川)

私は今まで、ごく短期間のフィールドワークはボルネオや幸島で行った経験があったがフィールドで得た資料を実験室で分析するような経験は全くなかった。さらに、ピペットや遠心分離機を用いる実験したいも動物科学実習で少し行っただけであったため、作業を分からないままこなすだけになってしまうのではとやや不安を感じていた。しかし、講師や他のメンバーのサポートのおかげでついていくことができ、有意義な実習となった。まだまだ理解が足りないところも多いと思うが、今後、もしフィールドで試料採集を行い分析するという可能性が生じたときは苦手に思うのではなく、積極的に検討しようと思う。

6. その他 (特記事項など)

杉浦先生、MacIntosh 先生、Claire 氏、Liesbeth 氏には大変お世話になりました。ありがとうございました。ならびに、この実習は PWS プログラムの支援を受けて行われました。厚くお礼申し上げます。